

## 水稻品種「ゆめさんさ」の栽培法

(農試県南分場・技術部)

### 1 背景とねらい

「ゆめさんさ」は本県のオリジナル品種であり中生の良食味品種として、主に北上川下流地帯の作柄安定化と産米の品質・食味の向上のため平成4年度に奨励品種に採用された。

「ゆめさんさ」は今後作付け面積の拡大が見込まれ、安定的に栽培する上での指標が早急に求められていた。

今回、現地および場内の試験を検討した結果、安定栽培する上で指標となる結果が得られたので指導上の参考に供する。

### 2 技術の内容

#### (1) 収量構成要素の指標

穂数 (本/㎡)	1穂粒数 (粒)	㎡当粒数 (千粒)	玄米千粒重 (g)	登熟歩合 (%)	稈長 (cm)	1.9mm収量 (kg/10a)
510~ 550	54~ 60	30~ 33	22.0 (1.9mm:22.5g)	85~	77~ 82	550 ~600

#### (2) 最高分けつ期茎数と期待穂数の指標

項目	最高分けつ期	穂数
茎数・穂数	680~800	510~550

#### (3) 栽培法

##### ア 施肥法

##### (ア) 基肥

基肥窒素量が少ないと分けつ数が少なく、穂数が確保しにくい傾向にあるので、「あきたこまち」より1kg/10a程度の増、「チヨホナミ」並とする。

##### (イ) 追肥

穂数及び1穂粒数を確保する必要があるため、追肥の重点は幼穂形成期とし窒素成分量で2kg/10a程度とする。

##### イ 刈取り適期

「あきたこまち」より登熟速度が早いので、出穂後の平均積算温度900~1050℃を目安として実際の登熟状況も観察して刈り取る。適期を過ぎると、着色や胴割れが多くなる。

##### ウ 品質

登熟期が高温の年には標高100m以下で栽培した場合、心白(乳白)の発生する危険率が高まるので適地での栽培を厳守する。

㎡粒数が減少すると千粒重が大きくなり心白(乳白)の発生する危険性が高まるので、穂数を確保するように基準にそった栽培を行う。

(4) 幼穂形成期・出穂期の予測におけるパラメーター  
ア 移植～幼穂形成期

A	Th	G	C	D
0.1291089	21.1161540	35.0903265	0.0378310	0.1716982

イ 幼穂形成期～出穂期

A	Th	G
0.3311479	18.9260595	17.9108868

(5) 栄養診断指標

項目	幼穂形成期
稲体乾物重 (g/m <sup>2</sup> )	400～500
稲体窒素濃度 (%)	1.7～2.2
窒素吸収量 (g/m <sup>2</sup> )	7.0～8.5

(6) 幼穂形成期における葉色の指標

測定法	測定値
カラスケール	3.9～4.6
SPAD葉緑素計	34.0～40.0

3 指導上の留意事項

- (1) 種子の休眠性が強いいため、催芽前の浸種を十分に行う。
- (2) いもち病の真性抵抗性遺伝子型はP i - iと推定され、圃場抵抗性は「チヨホナミ」には優るが「あきたこまち」並のため、「あきたこまち」に準じた適期防除に努める。
- (3) 「あきたこまち」よりは耐倒伏性が強いが、食味等も考慮して無理な多肥栽培は避ける。
- (4) 耐冷性は「あきたこまち」並の「中」なので、標高200m以上では栽培しない。
- (5) 穂数を確保する必要があるため、20.0株/m<sup>2</sup>以上の栽植株数を確保する。このことについては、継続検討する。
- (6) 幼穂形成期・出穂期の予測パラメーターは、「水稻生育診断予測支援システム」に入力して使用する。結果は、地域の生育状況などを総合的に判断して利用すること。なお、適地外の作付けに対しては誤差が大きくなることがあるので注意する。
- (7) 栄養診断基準については、継続検討する。